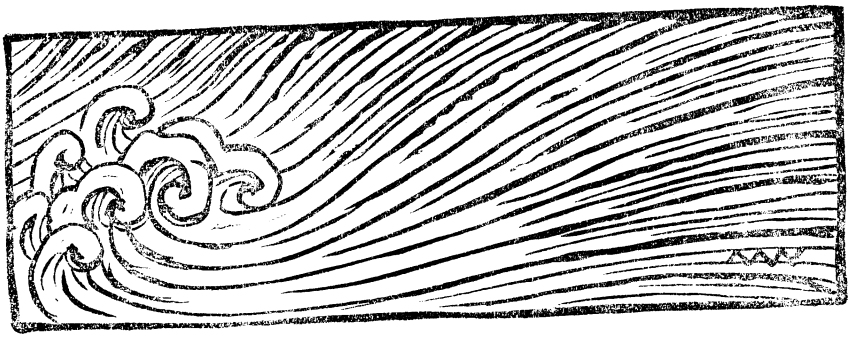


社會劇

爆發

中村吉藏

登場人物

呉服店丸嘉の主人　遠山嘉一郎
その妻　お道
その娘　近子
番頭　保科新介
手代　西田善吉
赤菱商會の三男　赤菱慶吉

時　現代

場所　東京下町の老舗の納戸

○

舞台正面の中央に、一對の眞鍮の眼を持つた中形の黑い金庫が据付けてある、その傍には帳場格子が置かれ、直ぐ背后の戸棚の下劃は帳簿簞笥が入つてゐて、上手隣は欄子窓になつてゐる、戸棚の下手には表の店頭へ通路の、薄と染抜いた紺暖簾がかゝり、つゞいて左手の一隅は電話室、その中央は二階へ上り口の段階子、一番前は壁になつてゐる、右手は障子を明放して、廻り椽が見え、直ぐその庭前に、鼻を突くやうに白壁塗の倉庫が立つてゐる、廻り椽と倉庫との奥の一角からは午後の薄暗い日蔭を浴びた青い庭木がチラ〳〵見えてゐる。

○

母のお道は四十余才の大年増、油濃い丸髷に結つて、少し拔衣紋で、懶さうに針仕事をしてゐる、その傍に、銀杏返の、廿歳前后に見える色の白い、眼の活々した娘近子は、折々溜息をしたり、考へ込んだりしながら白地の、男物の浴衣地を裁ちかけてゐる。

近子　（物尺を使ひながら）「彼のは、三尺六寸の丈で善いわねえ、お母さん、然うですね……」

お道　（氣の無ささうな調子で）「私は知らないよ……先刻、汝が自分で新介の單衣を引張り出して來て、寸法を取つてた癖に、もう忘れて了つたのかえ？」

近子　「何んだか頭がムシャクシャして、髮毛に火でも燃え附いてるやうな氣持がするんですもの、一寸前の事が夢にでも見たやうにうろ覺なの……寧そもう病氣になつて了やァ善いんだ……イヤ、もう私は病氣になつてるんだわ」（泣出しさうに云つて、物尺を投出す）

お道　（心配さうに、見つめて）「そんなに焦々しちいけないつて云ふにねえ……汝もう赤兒ぢやァあるまいし、一旦アヽして赤菱さんへ嫁くつて事を承知して、お父さんにも漸つと安心させたんだから、もう善い加減にしてあきらめを附けるんですよ、何しろ先方はお金が澤山あるんだから、それこそ汝の思ふ存分、贅澤も出來やうし、面白い目も見られやうて云ふもんです、一時は不幸と思ふた事が、後から見ると幸になるもんだからね」

近子　（獨語するやうな調子で）「そりや私だつて、貧乏華族の處へ嫁いて善い氣になつて威張つてる友達なんかにも見せ附けてやり度いんだから、浴びる程お金の

使へる處へ嫁つて見度は見度いんですけれども、あの人が繁々、此處へ出入し出してから、私は何んだか一日、一日忌アな氣持がして來てよ……第一、私はあの人のお喋舌が氣に喰はないわ、口先丈で、腹がないやうで、便にならない氣がするんだもの、永年、アメリカへ行つてたていふのも、學問の勉强や商賣の見習ぢやアありやあしない、あんまり放蕩だから、日本に置けなくなつたのだつて云ふんでせう……」

お道（呆れたやうに、遮つて）「まア、汝、……お聟さんになる人の事をそんなに惡口云つて、後ではこのお母さんに極が惡くなる時がありますよ、一體誰が汝に慶吉さんの事を惡く云つて聞かせるんだね……新助なんかが何處からか善い加減な事を聞き出して來て、汝を突つくんでせう？」

近子　「惡い事は誰でも云つて聞かせてくれますわ、こんな事になると、他人の方が親よりも正直ですからね……あの人が妾の子だつて云ふのも、仲人から私に打明けてくれたのぢやアありませんか、お母さんなんかは知つてゝも知らん顔をなすつてたんだもの」

お道　「汝のやうに、然うヅケ〳〵云つてた日には底も蓋もありやアしませんよ、他人は人の幸福を妬かんで、無理遣にでもケチを附けやうとかゝるんです、そりやあ慶吉さんが、大して豪い人間でもあるまいが、別に出世する見込もない家の新介などよりは、ズッと增ですよ、新介も從前辛棒人には相違なかつたけれども、この頃は宛で人間が變つたやうになつて、チョイ〳〵外泊なんかする、現に昨晩からまだ歸つて來ないぢやアないかえ、何もお稽古だから、汝が彼に浴衣位縫つてやるのをお母さんは、別に何んとも云やアしないけれども、今更、下らない事をヤキモキ思ふの丈はお止しなさいよ」

近子　（焦たげに）「私はそんなに新介の事許り思つてる

のぢやアないわ……私の良人になる人は、まだ何處か他にあるやうな氣がします、その人にまだ逢へない中に、親の命令で、無理に嫁付いて行くんだと思ふと、それが口惜しいわ……」

お道　「ホ、、、そんな夢のやうな事を的にして、ぼんやり待つてたら汝、腰が曲りますよ……（窘めるやうに）馬鹿な事を云ふもんぢやアありません」

近子　「ねえ、お母さん……新介が外泊つて來たりなんかし出したのも、この話が始まつてからの事だわ、彼が惡いのぢやアない、矢張、此方が惡いんです、私がついお父さんや、お母さんの口車に乘せられて、輕卒な承知をしたのが、いけなかつたんだわ、もつと考へて見りや善かつた、何うしてこんなに氣が弱いのでせう、私は馬鹿ね……自分で自分に愛相が盡きて了ふわ……チエッ……」（ヒステリカルに、浴衣地の切をモミクチャにする）

お道　（横から奪つて）「そんなに汝、肝癪を起すんぢやありませんよ……（布の皺を延しながら）こんなに皺クチャにして了つて、仕樣がないぢやアないか、折角の汝の信切が無になりますよ……一體、新介も何處をうろついてるんだろうねえ、此方で手を張るやうに思つてるのも知らないで、善い氣なもんだ、もう何處かに情婦でも出來てるのだよ、男子つて皆あゝしたもんだ、一圖に思込むのは眞實に馬鹿々々しいよ」

近子　（忌な顏をして）「私、彼の事をそんなに思つてるのぢやアないつて云ふにねえ、お母さんも理解らない人……先頃の朝なんか、彼がぼんやりした顏をして歸つて來たのを見ると、何んだか、淺ましいやうな憎いやうな氣持がしたんです、けれどもお父さんが頭から嚙み附くやうに叱り附けなさるので、私はつい氣の毒になつて、あんなに酷く云はなくても善かろう、お父さんもあんまりだと思ひました、あの時は、もう赤菱なんかへは行きませんつて、お父さんの前へ出て云つてやろうかと思つた位ですわ……」

體お父さんは冷酷よ、人情がないんだわ、あれが眞實の親か知らと、私、時々然う思ひますわ、小兒の時から、何んだか、そんな氣がするんですもの……」

お道　（濟まねやうな顏色で）「お父さんは唯、あんな性分なんだよ、加之、斯ういふ時勢になつて、商賣の方では、他に資本が澤山あつて、當世向の派手に、派手にとやつて行くのが段々出來て來るし、此方は焦れれば焦れる程、手許が苦しくなつて、行詰まつて來たんだからもがいて許りゐるんだよ、……考へて見ると氣の毒な人サ……」（欝ぎ込んだ調子）

近子　（小い嘆息を吐いて）「然う云へば私が小學校へ行つてた頃は、この店も隨分繁昌してゐましたけね、賣出しの時なんか、お客がもう黑山のやうに、店頭へたかつてゐた事をまだよく覺えてゐますわ、私が女學校を卒業する前後から、何んだか店へ入つても暗いやうな、陰氣な氣持がしてゐましたけ……尤も、三星だの、平木だのつて、傍にあんな大仕掛なのが出來ちや、とても敵ひませんわねえ、私等だつて、同じ買物をするなら、あんな處へ出かけて行く方が氣持が善いんですものね、大きい處は段々大きくなつて行く一方だし、小い處はそれに押されて、潰れて行くんだわねえ……」

お道　「これでも汝、「丸嘉」つて云へば江戸の頃からズツと續いて來た名代の老舗だつたのよ、店構こそ小いが、彼方此方の大小名の奥向へもお出入をして、御贔負を受けてたもんださうだからね、今このまゝで潰しちや先祖樣へも濟みませんよ」

近子　（陰氣に笑つて）「お母さんや、お父さんが、あんまり先祖々々つて仰やるもんだから、私迄それに感染れて了つて、つまらない虛榮心が燃え立つて來たんだわ……けれども相手が、華族で、富豪で……それから私の空想に描いてるやうな男子なら善いけれども、あんまり世間の評判の善くない赤菱の妾の子の處なんかへ嫁に行くのは、何んだか身を賣るやうな

忌な氣持がしてよ、人に笑はれるかも知れないわ」

お道　「誰が笑ひますか？　娘を持つた親は皆羨みます、そんな汝のやうに、立派な處へ嫁に行くのを、身を賣るの何のつて云つちやア、罰が當りますよ」

近子　「だつて私は、何んだかそんな氣がするんですもの……（兩手でソツト横腹を押へて）……寧そ罰が當つて死んで了つたら恰度善いわ」

お道　（娘の顏を熟と見て、泌々した調子で）「思ふ通りに行かないのが、婆婆つて云ふもんですよ……お母さんにだつて、汝の氣持は善く分ります、唯、お母さんはそこをヂッと辛棒して來たんだからね、矢ッ張月日は藥なんだよ」

近子　「お母さんはお父さんが好きぢやアなかつたのね？……でも今はもう善くなつて？」

お道　（人氣配に耳敏く）「シッ……お父さんらしいよ」

（遠山嘉一郎、もう五十才を越した、胡摩鹽頭の老人、少し血走つた眼が瞼しく光つてゐる、臺灣パナマの帽子をそこへ拋り出し、大島紬の上に、絽の羽織を着たまゝ、汗を拭き〳〵ぐつたり疊の上に倒れるやうに坐る）

お道　「お歸んなさい、戶外は暑いでせうねえ」

近子　「お歸り……手拭でも持つて參りませうか？」

嘉一郎　「否、要らないよ、まアこの羽織を取ろう……空梅雨でムウ〳〵蒸すもんだから、走り廻ると相應に暑い……加之、電車の中が混雜んで居てな、ずーと釣革にぶら下つてたもんだから、脚が疲れて棒のやうになつた、（押へて見て）少し腫んでやがる、歳を老ると何處も彼處も、損傷が出て來るんだな」

お道　（慰めるやうに）「でも貴方は氣一つで持つてるんですよ、今から弱音を吹いちやいけませんわ」

嘉一郎　（勢のない調子で）「そりやア自分でも氣は附いてるがなお道、今日といふ今日は、私もスッカリ雪隱詰になつたんだよ、銀行へ明日の正午迄に持つて行かなけやならないあの約束手形の貳千圓といふ金の工面が附かない、今日も三處賴みに行つて、三處な

から體よく斷られて了つたんだ、京都の織元へ知れたら品はバッたり止まつて了ふ、をまけに方々の債權者が湧き立つて來やうし、これで愈々丸嘉の店も戸を閉めなけやならん事になるだらう、然う思ふと、汝等にも申譯がない」

お道（曇った顏色で）「私はまだ何の口かで融通が附くだろうと思つてゐましたが、もうそんなに方々で、信用がガタ落に落ちて了つたんですかねえ、困りましたね……でもまだ赤菱へはお話なさらないのでせう？」

嘉一郎「如何に逼迫したからつて、丸嘉が二千圓の融通に困るつて云ふやうな事を、私の口から何うも彼處へはぶつけに談しには行けないんだ、勿論向ふでも、此方の手許の不如意な事は萬々承知してるんだから結婚の儀式が濟んだら、何萬圓かの合資會社にして、それ……デ……バアメントか……？」

お道「デバアトメント、ストアーだつたね、近子？」

嘉一郎「……その……ストアーにするつて目論見だろう、それが愈々成立つ迄は、此方でもヂット齒を喰縛つて、この襤褸々々の内兜を見透させ度くはないんだ、向では現金を積む……此方は丸嘉といふ老舗の古い軒簾が資本なのだから、その資本へ高い價の附く前に、頭から踏倒してかゝられるやうな、へマな眞似はやり度ないんだ」

お道（簪で頭の中を搔きながら）「それは然うですけれども、手形が不渡となつたら、それ限丸嘉の軒簾も潰れて了ふぢやアありませんか？　背に腹は替へられない場合ですから、寧そ赤菱へお打明けなさいよ、それより外に切拔ける途はありますまい……」

嘉一郎「困つたなア……（大息をして、時計を見ながら）時間はズン〳〵經つて行きやがる、これから夜通し駈けずり廻つても、明日の午は直だ、何んにも出來やしない、第一、もう他に的もないから、話すなら赤菱だが、それにしても彼處の親父にではいけない、慶吉

君にコッソリ云ふのだな、それも私は知らない事にして、汝等が内證に要る金だとか何んとか云ふのだ……近子から慶吉君に話してくれたら一等善い方法だがな」

お道（思案して）「然うですねえ……近子がダイヤモンド入の指環が買度いとか何んとか云つて賴んだら、屹度二つ返事ですよ（近子に）これも家の爲めだら、近子、一番然うして話して見ておくれよ、必死の場合だからね」

嘉一郎「近子一人では、萬一遣り損つた場合に困るから、汝も附いて行つて、何んとかその場を旨く取繕ふんだな」

お道「それぢやア寧そ慶吉さんに、此處へ來て貰ひませうか……然うですね……遊びに入らしつて下さいつて、近子から電話でもかけたら、あの人の事だから、もう大喜びで飛んで來ますよ」

嘉一郎（苦笑）「此方へ呼び附けて置いて、金を貸せも少ゝ跛が惡いよ、それよりか御苦勞だが、汝等二人で、向へ出かけて行くんだな、大切な場合だから失敗つたら取返しが附かなくなるよ（不安さうに）愈々いけなけりや私が正面から切り出して行くまでだが、マア〳〵それは最後の手段だ」

お道「近子や、電話をかけて御覽、お家に居らつしやるか何うか聞いて見るんですよ、汝が掛けた方が善いんだから」

近子「私は忌だわ」

嘉一郎（戯談らしく）「極が惡いのかい、大きな赤兒だな、今にお聟さんになろうていふ人に、遠慮なんかしてちやいけないよ」

近子（冷淡に）「あんな人に遠慮も何もありやアしないわ……唯、私の氣が進まないのです」

お道（窘めるやうに）「汝の我儘にも困りますよ……私が電話をかけませう）（膝の上の糸屑を拂つて起上り、電話室へ入る）

嘉一郎　（近子を見て）「汝はも少と、他様との交際を心得て置くが善いよ、何時も赤菱さんが談話しに來て、汝へお愛相のつもりでものゝ十口も利く間に、汝の方ぢやアせい〳〵一口しか返事をしない、漸つと半口位で濟まして置く事もある、私も始めの中は、耻かしがつてるのだらうと許思つてたが、この頃は少し氣になつて來た、あれぢやアいけない、夫婦になつたら、亭主を慰めるのが、女房の役目だから、今の中から心掛けて機嫌を取るやうにしなさい、一生の事だからな」

近子　（沈んだ調子で）「だつてこれが私の性分ですもの、仕方がありませんわ」

嘉一郎　「その癖、汝は他の人とは善く話もしてるぢやアないか？」

近子　「一體、あの人は……慶吉さんは、人一倍よくお喋舌をなさるんですよ、私なんか、とてもお話の相手は出來ませんわ」

嘉一郎　（苦い顔をして）「……兎に角、赤菱商會といへば、今ぢやア日本でも屈指の中に入つてる大きな商賣人だからな、其處へ嫁くのは汝の出世だよ」

近子　「だつてお父さんは、赤菱商會はコンミッション取の御用商人で、現に裁判沙汰にまでなつてるし、あんな評判の悪い成金と、この老舗の丸嘉とは家柄が違ふつて、始の中は仲人に向つて隨分惡く云つてらつしやつたのぢやアありませんか？　それを後ではもう人が變つたやうに、無闇に唯難有がつてらつしやるんだもの……お父さんは金に惚れてゐるのよ」

嘉一郎　（苦笑）「汝等には駈引といふ事が分らないんだよ……ハヽ、商人が金に惚れるのは當然だ、イヤこんな時勢になつちや、女でも金に惚れないのは馬鹿者だ、假令自分で何んなに怜悧ぶつても世間から馬鹿にされるんだから仕様がない、汝だつてもう大分怜悧になつてる筈だかな」

お道　（電話室から出て來て）「まア、恰度善かつたんです

よ。此から遊びに行かうと思つてた處だから、直ぐ伺ひますつて、」

嘉一郎（眉を顰めて）「來られるのは善いが、其處を此方から押掛けて行かないと、話が仕憎いぢやあないか？　氣が利かないな……もう電話は切つたのかい？」

お道「もう切つて了ひました……何處か會社へとか一寸と廻つて、それから伺ふつていふ事でしたから、押かけて行くのは却て邪魔ですよ」

近子「來るといふ事なら來させたら善いでせう、私は此方から行くのは忌ですもの、金の無心になんか……人に顏を見られるやうで、こんな極の惡い事はないわ」

嘉一郎（嘆息を吐いて）「女つて皆、眞實に我儘者だ……忌だの、極が惡いだのつて、それ位な事が一番の苦勞だと思つてるんだ、男子の苦勞は少とも分つちやゐない」

道子「だつて、女には又女の苦勞がありますもの……誰にも云へないで、自分一人の胸の中で死ぬまでヂツト苦んでゐなけりやならない事がね」

嘉一郎（鼻で笑ひ）「フン、流行の帶が調へて貰へなかつたり、見度い芝居が見せて貰へなかつたりする不平位なもんだらう……だが近子には赤菱さんが附いてるから、そんな苦勞は無くなるよ」

近子（淋しく笑つて）「ホヽヽ、だから男子つて皆呑氣だわ……お父さんなんかには、お金だの、家柄だのが一番大切なものでせうが、女はそんなものは何んでもないと思ふ場合が澤山とあつてよ、それなのに、男子に引づられて行かなけやならないんだもの、弱い者だわねえお母さん」

お道「つく〳〵然う思ふ事があるね、世間は男子に許威張らせて置くんだものね」

嘉一郎「ハヽヽヽ、此家ぢやアお婆さん迄が、此頃の新聞に出てる「新らしい女」のやうな事を云出して

來たな、オイ、止してくれい、丸嘉は丸嘉の家風でやつて行けやそれで善いぢやアないか……時に、新介はまだ歸つて來ないのかい？……彼奴もアヽまで性根が腐つちや仕樣が無い、此際奇麗に暇をやつて了ふんだな、アヽして置いたら今に飼犬に手を嚙まれるやうな事が出來するかも知れない、イヤ、もう、うつかりしちや居られない、先日から善吉に云附けて帳簿を調べさせてあるんだが、一體、何うなつたのかな……（起上つて店口に向ひ）善吉……善吉……チョッと來てくれ」

（暖簾口から前垂掛の、手代風の若い男が耳に筆を挿み、帳簿を手にして入つて來る）

善吉　「お召になりましたか？」

嘉一郎　「調べは何う附いたのか？　まだ帳尻を合はせて見ないのかい、取引先への掛合は何うしたのだ？」

善吉　「イヤ、昨夜まで夜通しで品物と引合せて調べまして、この通り、一先づ片は附いたのでございますが、若し間違があつてはと思ひまして、今、二度遣り直して居りますので……」

嘉一郎　「略方で善いんだ、詳細い事は後廻にして、ザット帳尻に間違は無いのかい？」

善吉　（頭を掻いて）「實はその、愈々一錢一厘も間違のないといふ處は分りかねますが、略方當つて見ましたのでは、何うも大分怪しい事がありますので」

嘉一郎　（眼を光らせ）「何アに、怪しい……幾何間違つてるんだ、幾何？」

善吉　「エヽと、左樣でございます、此方の當坐帳と本帳と現品とを突合せて見ましてザッと五百圓の餘喰違ひが出來て居ります、この一月の間の事でして……その中には古い懸金の寄つた筈なのが、附落になつてゐるのも三四箇處はあるやうでございます、念の爲に一應電話で掛合ひますと、御得意樣からお叱言を食つて、受取證を見せやうかつて、仰しやるのもあります」

嘉一郎（眼色を變へ）「エ……ぢやア彼奴がそんな不埒な事を仕出したのふ……皆で五百圓の餘といふんだな」

善吉「ザッと然うなります、詳い事はまだ分りませんけれども……」

嘉一郎（符箋の附いた帳簿を調べながら）「フム……フム……然うか……人の落目に附込んで、不都合千萬な事を働きやがる……もう容赦はならん、皆の者にも然う云つて置け、新介の眞似をやつた奴は、片ッ端から縛り上げて暗い處へ叩き込んでやるぞ……不屆な野郎め……不埒な野郎め……店の者が皆同謀になつてやつてるんぢやアあるまいな？」

善吉「何う致しまして……番頭さんが店の帳場を一切預つてゐましたので誰も氣が附かなかつたのでございます」

嘉一郎「善くお互に氣を附合ふが善いぞ……この帳簿は此方へ置け、これから毎晩、私が一々調べるからつて、皆にも然う云つて置いてくれ……もう店へ行つても善い、今は用事はない……」

善吉「ヘイ……誠に何うもとんだ事で」（と逃げるやうに入る）

嘉一郎（頽然して）「ア、とう／＼飼犬に手を嚙まれたんだ……十五年の恩を仇で返しやがつた（興奮的に）奴、この儘ぢやア置かないから然う思つてやがれ……直ぐ警察へ屆出てやろう」

お道（愁の色）「まア五百圓も使ひ込んだのですつて、情ない事をしてくれました……だがまア、表沙汰にするのはお待ちなさいよ、逃げた譯ぢやありますまいから、」

近子（沈んだ調子）「そんなに大膽な事を仕出したのですかねえ……でも可哀さうね、自棄を起したのですよ」

嘉一郎「主人の頭を土足にかけて、それで濟むものと思つてやがるんだらうか？　こんな事をした奴は、

私は骨まで憎い、屹度、今に思知らせてやるから見てゐろ（何處となく睨み据えて）…　待て、金庫の中に異狀はないか知ら」（錠を明けて調にかゝる）

お道　「まだお金が大分入つてたのですか？」

近子　「株券なんか、ずつと前にお父さんが、スッカリ持出してお了ひなすつたのぢやアありませんか？　相場で皆耗つて了つたつて仰つたのでせう」

嘉一郎　「まア入らざる口を叩くな…　いろんな書附が收つてある、大切な書類だから持出されてはならんもんぢや……フム、何うも少し怪しいな、誰か此處を明けはしないか？……合鍵は私が持つてたから、それを盜まれる筈もないが……」

お道　「何うなつてるんですか？」

嘉一郎　「書附の置場處が違つてゐる、中を掻混たやうな樣子がある……別に紛失物はないが」

近子　「お父さんの思違ひでせう？」

嘉一郎　「イヤ、何うも誰か明けたやうだ……彼奴か合鍵を持つてゐるのぢアないかな？」

お道　（輕く笑つて）「新介がですか？　マサカ、それ程の惡黨でもありますまい」

嘉一郎　「兎に角、帳簿やら、掛先やら善い加減に胡魔化して、現金を着腹するやうな盜人を此家に隱まつてゐては、一刻も油斷がならない、歸つて來たら早速交番へ附き出してやるんだ」

お道　（憐むやうな口調）「彼ゝ昨年の暮頃から、かねての約束通り、軒廉を分けて貰ひ度いつて、しきりに貴方にせがんでたんぢやアありませんか？　それがついぞる〳〵べつたりになつたもんだから、間違つた考を起したのですよ、長年あんなに善く勤めてくれた男子ですのにねえ」

近子　「お父さんが約束通にしておやんなすつたら善かつたんだわ……此方にも落度があるのです」

嘉一郎（勃とした顏色）「母子して、あの泥棒の肩を持つのかい、汝等がそれ程の結構人揃ひなら私はもう知

らない、寧そ店の品物なんか皆奉公人に勝手に分取をさせて、何も彼も無茶苦茶にバラ撒いて了つた方が早く片が附いて善い、私が獨りで、こんな苦勞するのは大痴呆の骨頂だ」

（この時、人影がフラ〳〵、廻り椽の先から倉庫の方へ消えて行く）

近子（眼敏く見て）「アラ、新介ぢやアないか？」

嘉一郎「エ、……今のはあの泥棒かい、倉庫へ入つて又何か盗み出さうとしやがるんだろう、圖々しい、その儘に置くもんか」（椽先から駈け下りて行く）

お道「貴方、手荒な事をしちやアいけませんよ」

近子（起上つて）「お父さん、眞實に酷い事をなさるのはお止しなさいよ」

（母子は不安に窒息した如く、凝立する、倉庫の中では騒かしく罵る聲が一しきり、やがて嘉一郎は新介を引立てるやうにして連れて來る、新介は三十前后の、斬髪が亂れて、眼に沈欝の光を持つた、神經質らしい痩形の男子である）

新介「逃げも隠れもしませんから、まア靜かに仰やつて下さい」

嘉一郎（激昂して唇頭も慄えながら）「一體何用があつて倉庫の中へなんかコッソリ忍び込むんだ、貴様は晝鳶の仲間入をしたのか？」

新介（落着いた調子で）「まアあんまり口汚く仰やるものぢやアありません、私は倉庫の中へ入つて、少し考へ事をしやうと思つてたのです、この頃、私の癖になりましたので……」

嘉一郎「フン、倉庫へ忍び込む癖なんか附いちや汝もう札附きだ、そんな奴にうろ〳〵されちや堪らないから、これから直交番へ突出してやる、さア一緒に來い」

お道「貴方、まアそんなに大きな聲をなすつちや近所へ聞えますよ」

近子「お父さんはあんまり酷だわ、もつと落着いて仰つたら善いぢやアありませんか？」

嘉一郎「まア其處へ坐るんだ（新介を座敷に引据えて、その前に座す）「貴様はお得意先や店の帳簿を胡魔化して、

その金を何うしたんだ、何處で使ひ捨てんだ、不埒な奴貴様には丸嘉の今日の内證が分らないか？私が百圓の融通にも苦んでゐる矢先に、主人の金を盜んで野良をこき歩くとは、一體何うした了見だい、貴様はそれでも人間の皮を被つてる氣か、この恩不知の畜生めッ」

新介（一寸と凄い笑顔をして）「然う曝露て了つたのなら、私は別に隱立は致しません、仰やる通、いかにも五百圓餘りの金は私が遣ひ込ました、それ丈、私はお店へ借錢が出來た譯です……だが且那さん、然う云へば貴方も十五年の間、私から借錢をしてゐらつしやるんです、恰度去年の暮に、その方の形を附けて下さる期限が來てゐるのに、始めから證書が出てゐなかつたといふのを楯に、貴方は水へ流して了はふとなさるんだ、そんな蟲の善い事がありますか、それ許りぢやァない……」

嘉一郎（遽って）「默れッ、主人に向つて借錢があるのの何のつて、不屆千萬な口上だ、元來軒簾を分けてやらうていふのは、主人のお情なんだ、それを此方の借錢だつて、罰當りめ、恥を知れ、耻を……」

新介（冷やかに笑つて）「そりや私も此方様へ、始めて御奉公に上つた時は、眞の子供でした、十五年勤めたら、店を一軒出させてやるつて仰つたのを、難有い事だと思つて、身に泌みる程御恩に着てゐました、一つはそれを勵に及ばずながらズーッと蔭日向なく御奉公大切に勤めて來ましたが、イザとなつてそのお約束通りにして下さらないのぢァ、此方は無駄骨を折つた事になります、自分の口から云ふのも可笑しく聞えませうが、私は若い朋輩同士から、交際だと云つて、色町へ引張られても、これが身の毒だと思つて、是迄一度もそんな處へ上つた事はなかつたのです、考へて見ますと、人間の面白い眞盛りを、見向もしないで私はまァ、あの馬車馬か何かのやうに塵埃まみれ、汗まみれになつて通り拔けて了つたのです

ね、それ丈ならまア善いでせうが、男子の出世盛り、働き盛りの十五年つていふ長い月日を、私は此家様の爲めに棒に振つて了つた譯ぢやありませんか…」

嘉一郎（吐出すやうに）「そんな事は今聞かなくても善い、汝はそれで自分のした事が惡とは思はないのか？」

新介「まア、一つ、私の身にもなつて考へて見て下さい、田舍で髮結をして、私が一人前の男子になるのを一生懸命待焦れてゐた母親は、この春、急病で頓死して了ひますし、親戚の宿屋へ厄介になつてた妹は妹で、私生兒を産んだといふ報知が來ますし、私はこの頃、自分の腑甲斐ないのを地輔踏んで悔んで居るのです」（胸が塞がつたやうに言葉が切れる）

嘉一郎「何も私は、汝に店を出させてやらないとは云ひはしない、だが今の今と云つて、そんな事の出來ない譯は、こゝの内證を知つてる汝に善く分つてる筈ぢやアないか？」

新介「そりやアお店の樣子を知つてゐますから、昨年の暮に、織元の會社の方に相當な口のあつたのを幸、そこへ入りたいと申しました、もう私も三十だから、自分で自分の身が立つやうにしたいと云つて、お暇を願ひました、其時、且那を始め、奥さんからも、いろ〳〵お話がありまして、他の奉公人に行かれるのは仕方がないが、汝丈は一番古くからゐるのだから、今一息辛棒してくれ、行々は聟養子にするとまで仰やつたぢやアありませんか？私は馬鹿正直だから騙されたのです……お嬢さんにまで騙されたんです」（近子の方を尻眼にかける）

嘉一郎「聟養子と云つても、此家には跡取の息子がゐる、賢太郎が神戸の商業學校に行つてるのを汝、知らない事もないだろう、私は自分の口から、そんな約束迄した覺は無い」

お道（辯解するやうに）「そりや私がつい、口を滑らしたのは惡かつたけれどもね、汝を騙したりなんかせうて腹で云つたのぢやアありませんよ、私は氣の毒で堪

らない」

嘉一郎「いかに何んだつて、主人の金を使ひ込むといふ法は無い、恩を仇で返すつて云ふもんだ」

新介「けれども旦那、この二三年以來、高は僅かでございますが、私が隨切長い辛棒で貯め込んだ金まで、チョイ〳〵引出してお店の遣繰に御用立てた事もないではありませんよ、別に云度はないんですが、私の名で高利貸から融通して貰つてる口もあります、氣が附いて見ると私なんかゞ好人物つていふ奴の標本でしたろう、旦那は恩だ、恩だと仰やるが、結局斯うなつて夢が醒めた後では、去年の暮に店を出て行つた連中の云つたやうに、高が傭主と傭はれ人との間ですからね、恩も義理も五分五分ぢやアありませんか？イヤ私から云ひますと、差引まだ大分、お店の方が借方になつてる勘定です」

嘉一郎（激昂する情を抑へ切れぬやうに）「馬鹿ッ、よくもそんな圖々しい事が云へたもんだ、貴樣が融通した端金なんか皆返してある、第一、ッベコベと口答をするからが不埒だ、私が昔、奉公してた頃は御主人樣の方へ足を向けて寢た事もないんだぞ、いかに時勢が變つても、主人は主人、奉公人は奉公人だ、他の者への見せしめもある、さア交番へ來い」（襟髮を取つて引立てる、店頭の方からは自動車の笛が聞える）

新介（振りもぎつて、蒼青な顏色をして）「止して下さい、交番へ行く前に、此方から裁判所へ訴へて出ます、契約に反いたのを訴へます、加之に近子さんとの關係も打明けて云つて了ひますよ」

近子（驚いた眼色で）「まア……」

お道「新介、何卒ね、私が賴みますから」

嘉一郎「何を贍言をぬかすんだ、主人を突飛ばすとは愈々堪忍ならん、奴、地上を引ずつてゞも連れて行くぞ」（と喇り立つて摑みかゝる）

（店頭から「さア何卒！」と手代善吉の案内の磨白リネンの洋服に赤ネクタイ、鼻眼鏡をかけた、二十五六才の赤菱慶吉が暖簾の間か

ら顔を出す)

慶吉(笑顔で)「何んだか御賑かな様ですねえ、皆さん、今日は……」

嘉一郎(周章てゝ、急に手を放して)「ア、赤菱さんですか……これは善うこそ……(新介に向ひ)貴様は一體、此處へ來るんぢやアない、店へ行つて、もつと切々と帳面を附けるんだ、イヤ帳面ぢやアない、お客のお相手をするんだ、お客の、……なまけ者め」(と店頭の方へ、押だすやうにする)

慶吉(入つて來て)「別にお取込ぢやアありませんか、」

嘉一郎「イヤ何うしまして、一寸と目を離してゐますと若い者は兎角遊んで仕様がありませんので、折檻をやつてたんです、何うも飛んだ處を御目に蒐けまして……先づ今日は、……その後は御無沙汰を致して居ります」

慶吉(會釋)「今日は……お母さん……近子さん、今日は……先刻はお電話を難有うございました」

お道「善うこそ……まアずつと此方へ……取り散らかして居りまして(仕事を片附けながら)……あの二階へ御案内しましたら……近子さん、然うをしなさいよ」

近子「ハイ……」(生返事をして起かける)

慶吉「イヤ、何處でも結構です、お針仕事ですか?ナカ〳〵御精が出ますね(手巾で顔をくるりと拭いて)何んだか、忌に蒸暑いぢやアありませんか、降る時分にはザアーと降つてくれないといけませんね、照つたり、曇つたり、人間を弄ぶやうな空模様は忌ですね」

嘉一郎「御尤です、私なども氣候の所爲か、頭が重くて、途を歩いてると折々、前へ突込んで了ひさうな心持がしますよ、夜なんかも落々眠られないので、つい肝癪が嵩ぶつて來ましてね」

お道「ホ、ヽ、宅のはもうこれが持病でございます」

近子(小聲に)「眞實ね……」

慶吉(交際口調で)それやいけません、御用心なさい……時にいろ〳〵御心配かけました親父の商會の方の、

例のコンミッション一件も、漸く片を附けましたよ無論、父は承知してゐなかつたんですが、支配人等が、外國の軍器製造會社から受取つた三十萬圓といふものは、結局不當利得ですからね、その儘父の手に收める譯には行きません、それで彼をそつくり出獄人保護事業に寄附させる事にしました、僕の發案です、米國にゐる時分に、僕もチョイ〳〵彼方の監獄を視察しましたし、出獄者を保護してやる者がなければ、再犯三犯と罪惡を重ねて行く許ですから、徴罰の効果の上らないといふ事を痛切に感じましたよ、新聞で見ますと、現に淺草邊りにも、五十幾歳かの醜業婦で、賣春百何十犯と云ふのがあるさうですね、これ等もつまり一度一度、罰金を出す爲めに稼がなけりやならないし、第一、生活が出來ないから、こんな事になる譯ですから、何うしても保護事業が必要です、さうして又、寄附をすれば、今檢擧されてる支配人等も、自然、執行猶豫か、何かの恩典に預るんですからね」（得意げに云つて、人々……殊に、近子の顏を見る）

嘉一郎「へエ……すつかり御寄附なさるんですか？」

慶吉「その方がサッパリして了ひますよ　兄貴等は二人とも、何かぐづ〳〵云つてましたが、親父は例の太つ腹ですから、私の意見に贊成してくれました、私も始めて褒められましたよ、洋行の甲斐があるつて、ハ、、、、、」

お道「御宅のやうに、手廣く大きな御商賣をなすつてると、おやんなさる事が違ひますわねえ……世間には僅か許なお金に屈托してるものが隨分ありますが、貴方等の眼から見たら嘘のやうでせうねえ」

慶吉「イヤ、これで僕も米國にゐる時分には、ナカナカ苦勞をしましたよ、僅かの當飼扶持でしたからね……だがお庇で世間の事も少しは分つて來ましたハ、、、、、」

嘉一郎「イヤ、貴方なんかのは、苦勞と云つても眞の

眞似事ですよ、まア何しろ結構な御身分です……ア、

近子、アイスクリームか何か、氣が利かないな」

お道「オ、私が茫然してゐました、近子は些と御話の御相手をなさいよ……大きな赤兒でして、何うもなりません」

近子「お母さん、私が行きますわ、御免遊ばせ」（と匆々に起つて行く）

嘉一郎（取繕ふやうに）「何うも羞恥屋で困つて了ひます、柄ばかり大きくつて、一向世間慣れない未通娘でございますので、何時も失禮計致します」

慶吉「イヤ、日本の娘は彼處に奥床しい處がありますヤンキー娘のやうに無闇に跳つ返りの、お轉婆にはもう懲々してゐますからねハヽヽヽ」

お道（嘉一郎に）「あの二階の方が善いぢやアありませんか？」

慶吉「イヤ、此處の方が却つて家族的で、ゆつくり御話がしてゐられますよ、御客樣扱ひにされると、何うも長居が出來ませんからねハヽヽヽ」

お道「ではまア、何卒御自由に、おくつろぎなすつて」

嘉一郎（獨り頷いて）「ア、然ういふ事なら、おくつろぎなさる前に、チョッと御耳を拜借しませうか、二階で些つとの間ですが？」

慶吉「何かお話が？」

嘉一郎「實はその、お話し惡い事ですが……まア此方ではもう御親戚同樣に思つて居りますので、打明談がしたいのです……實は奉公人が不埒を働らきましてね」

慶吉（怪訝の眼色）「エ、何事です？……ア、今の……彼ですか？」

嘉一郎「實は彼が大金を使ひ込みましてね……まア何卒二階へ」

慶吉（稍安心したやうな調子で）「ア、お金ですか？……フーム、それは兎に角御心配でせう、何卒打明けたお話を聞かせて下さい、その方が僕も嬉しいのですよ、

斯うなつちやもうお互に隱立ては氣まづいですからね」

嘉一郎（元氣づいて）「何卒此方へ……」（二人は二階へ上る）

近子（浮かぬ顏色で出て來て）「二階ですか？、然う云附けて置きましたよ」

お道「お父さんが自分で金の話をするんでせうから、私等は助かつたよ……（低い調子で）でも新介は迷惑だね、皆、彼に塗り附けて了ふんでせうよ、お父さんは昔から駈引の旨い人だからね」

近子「エ……ぢやア新介が二千圓使ひ込んだとでも言騙めるのでせうか？、まア酷い人……お母さん、私はもうつく〳〵忌になりました、他に心配で堪らない事もありますからもうこの緣談は斷つて下さい、私は嫁きませんよ」（ぐつたりと座つて了ふ）

お道（周章て）「汝、今更そんな事を云つて、人を困らすのぢやアありませんよ、今のは私の邪推だからね、マサカ、お父さんがそんな出たら目の嘘ッ八を云つて、胡摩化しもしないでせ、、汝は直眞氣になつて了ふからいけませんよ」

近子「否え、お父さんは、それ位の事を云兼はなさらないわ、才子ですものね、それはまア何うでも善いが、私、まだ他に氣にかゝる事があるんですから……」（考へ込んでゐる）

お道「氣にかゝるつて、何んな事？」

近子（當惑顏で）「今は云へないわ……それよりかお母さんはお父さんを何う思つて？隨分得手勝手ぢやアなくつて？」

お道「何しろ彼の人が才子だから、私の親の鑑にも留つて此家の婿にもされたのです、……けれども世間は思ふやうには行かないんだね、あの人の代になつて、丸嘉もこんなに沒落しかゝつたんだからね」（嘆息を吐く）

近子「ですから才子も金も本當の便にはならないんだわ、私の胸で思つてる人が出て來る迄、此の儘で居

た方が善い、……お母さんとお父さんとで、今に食べるにも困るつて、あんまり心細い事を云ふんですもの、私もフッと氣が迷ひ出して、エ、何うせ一生だ、出來る丈虛榮を張り通して見度い、金の力で何んでも仕度三昧をしてやりませう、それが此家の爲めにもなるのなら、兩得だと思つて、ついあんな返事をして了ひましたが、お母さんの事を考へると結局は失敗ですわねえ、母子でそんな失敗を繰返すのは馬鹿げてゐますわ、お母さん斷つて下さいよ、それでなけりや、寧そ私が二階へ上つて、然う云つてやりますわ」

お道（ハラ〳〵して）「コレ、靜かにおしよ、聞えますよ」

近子（興奮して）「聞えたつて構はないわ」

お道「まア此方へお來（手を引張るやうにして、端の方へ連れて行き、涙ぐんだ聲で）そりやア汝の心持は私にも分つてゐますよ……お母さんだつて覺えのある事です……けれどもその辛い處を我慢してくれなけりやなりませんよ、この前にも薄々話はしたんだが、打明けて云ふとね（邊を見廻はして）お母さんが汝のやうな娘の時に、思つてた男子と云ふのは、矢ッ張、店の若い手代だつたのよ、併し兩親が、それよりも働のある一番番頭の方が、末の見込が確だからつて、無理遣、今のお父さんと夫婦にされたのですよ」

近子「それでお母さんは、今ぢやア幸福だつたと思つて？」

お道（淋しく笑つて）「夫婦つてものは、皆斯んなものでせうよ、幸福だか、不幸だか分らないのが、まア幸福なんだろうね」

近子「私はお母さんが可哀さうだわ、親つて皆、勝手な事をしますわねえ……だがお母さん、私はまだ隱してたけれども、あのね（耳の傍へ口を寄せて、囁く調子で）私と新介とは、別に戀仲と云ふのぢやアありませんけれども唯お母さん等のやうに、心で思つてるといふ丈ぢやアなかつたのですわ」

お道（頷いて）「そりやァお母さんだつて知つてゐますよ、……汝等がチョイ〳〵、そこの倉庫の中へ忍んで入つてたのを知つてゐます」

近子（赧くなつて）「エ……お母さん、眞實に？」

お道（樂つたいやうな笑顔で）「ホラ、あれでせう、倉庫の窓の下に、鎧櫃が藏つてあるね、あの蓋を明けると、隅の方から樟腦臭い書本が、出て來るでせう、小娘の時から、他に遊び相手は無し、私は下女と倉庫へ物を藏ひに行つちや一人殘つて一時間も、二時間も、あの中で過したもんですよ……汝にはあれが眼に附いたのでせう?!」

近子（眩しさうに）「お母さんも矢ッ張り……」

お道（依然、囁くやうな低調で）「耻を云はぬと分らないが、お母さんは夫婦の祝言をする前に、その若い手代と二人で倉庫の中へ入つてゐたんですよ、私は汝と新介とが、薄暗い夕方なんかに倉庫から、出て來るのを見ると、自分の若い時の事を思ひ出して、何んだか竦としたんだよ……（倉庫の方を見て暗い表情で）一體この倉庫は何代か前に建てた古いものなんで、中に鱗の金光のする大きな青大將が住んでゐたのよ、それが主だとか、此處の金の神だとか云つてたのだが私が今のお父さんと祝言する事が定ると、若い手代が、氣が變になつて、その主を叩き殺して、それ限行衛不明になつたのですよ、床板に血まみれになつた蛇の形が附いて何うしても消えないの、私の眼には今でもそれがアリ〳〵と分ります、この家がいけなくなつたのは、あの男の執念や……、あの主の祟ぢやアないかと私は折々然う思ふんだよ……」

近子（襲はれたやうな眼色で）「まア眞實に？……その祟かも知れませんわねえ……私、濟まなかつたけれども私が新介を誘つたのか、新介が私を誘つたのか、分らないんですよ……何んだか男子の力で手込にされたやうな氣もしますわ、それもお母さんが、婿になる人だと仰つたのを聞いてから、私の氣が緩んだの

でせう……でも赤菱への縁談が持上つてから、私はもう寄せ附けないやうにしてゐるんです」

お道（相不變、低い調子で）「あつた事はあつた事で仕様がありません……お母さんもその時の事を振返つて見ると、何んだか恐くもあるし、一生に一度限の樂みだつたとも思ひます……何んのお父さんだつて、女郎買はする、妾は置く、今でもチョイ〳〵女道樂はやつてるんだからね、私許が惡いと悔んぢやゐません、男子は得だと思つてあきらめてるんですよ、だから汝ももうそんな事は此邊で弗ッり、思切つて、赤菱さんへ嫁くんです、竹の柱に茅の屋根なんて云ふのは、歌で丈聞いてりやア善いんだよ、現に斯う內證が苦しくなつて來ちや、お母さんだつて、昔の色の戀のを思出してる暇もないんだからね、汝は富豪の處へ行つて、思ふさま贅澤に暮らすのが得ですよ、一生の事だもの、それが此家の爲にもなるんだからね」

近子（淋しい調子で）「お母さんの仰る通にするのが怜悧は怜悧ですわねえ、……けれども何んだか私は胸の底に空虛が出來てるやうで、寂しい、物足らない氣持がしてならないんです……（思切つたやうな顏色で、邊を氣にしながら）加之ね、も一つ心配なのは……（母の耳へ口を寄せて）お母さん、私は體が少し變なのよ」

お道（針にでも刺されたやうに）「エ……何時頃から？」（四邊を見廻はす）

近子「つい先月位からの事ですけどもね……確りは分らないんだけれども、萬一、そんな事だと後から大變でせう、それで一つは進まなくなつたのです」

お道（思案して靜かに）「何に、構やアしない……そんなに心配する事はないよ」

近子「だつて私、心配だわ……今から苦になつてならないんだもの」

お道（淋しく笑つて、耳へ口を寄せ）「近子汝は今のお父さんの子だと思つてるのでせうね？」

近子（驚駭の眼を睜って）「エ　まア、お母さん……私は然うぢやアないんですか？」

お道「シッ……聞えますよ……そりやアお母さんにだつて、眞實の事は分りやアしないけれども、お父さんが、月不足だとか何んとか云つて私を善く虚めてたんだから、最後には、私にもそんな氣がして來たんですよ」

近子「まア……それで私には冷淡なのだわ……けれども、自分で恐ろしくはないの、お母さん？」

お道「仕様がないぢやアないか？自分が好いて亭主にしたんぢやアない、親が然うしたんだもの、それ位な事は大目に見てくれなけやね」

近子（沈鬱な表情）「ぢやア私もお母さんの通りの事を繰返すのかねえ……もう彼の人を妾の子だなんて笑へる處ぢやアないわ……（長い太息を吐いて）……こんな事を代々續けて行つて善いんでせうか？」

お道「善いの、惡いのつて、何うしやうもないぢやアないか？」

（近子は深く考へ込んでゐる、善吉がアイス、クリームの岡持を持運んで來る）

善吉「漸つと持つて參りました、小僧さん、新米で店頭へ飛び込んで來ましてねハヽヽヽ」

お道「隨分、手間が取れたのねえ、……近子、二階へ持つて行つておくれ」

（善吉は立去る、此時二階口から話聲が聞えて、嘉一郎と慶吉とが降りて來る）

嘉一郎「何うもお手間を取らせました」

慶吉「イヤ、僕の方の話が長くなりましてなハハヽヽヽ」

お道（笑顏で迎へて）「ア、折角、持つて參ろうと思つた處でございます、何卒召上つて」

近子（愛嬌を作つて）「さア、何卒此方へ、風通しが善うございますから」

慶吉「難有う（座りながら）……一寸と急に歸つて來な

けりやなりませんで、又明日でもゆつくり伺ふ事にしませう」

嘉一郎「まア、一つ、召上つて……私がいろ〳〵御心配をかけて、早速御承知下すつたのだよ、皆お禮を云ひな」

慶吉（笑顔で）「イヤ、お易い御用で……（アイス、クリームを啜りながら）近子さんもチと、濱町の宅の方へ遊びに入らつしやいな、つい近い所だし、さう遠慮せんでも善いでせう」

近子「難有うございます……近日、是非一度御伺ひ致しませう……何んだか出無性でございましてね」

慶吉（莞爾して）「お伺ひぢやアない、お遊びにですよ……些と交際界へも顔を出すんですな、これからは大に快活にやりませうよ、僕はこの通り、書生ッ坊ですから、宅ぢやゞ禮儀作法は要らないんです、此處のお父さんとは、デパートメント、ストアーの方の設計圖を引いて見るんですが、貴方とは新築の邸宅の圖案でも相談しやうぢやアありませんか？ハヽヽヽヽ」

お道（戯談口調で）「ホヽヽ、近子も出來るだけ、贅澤に暮したいんださうですから、御邸宅の御新築ならいろ〳〵注文が出る事でございませうよ」

近子（赤とらしく、はしやいで）「そりやもうお困らせするかも知れませんわ」

慶吉「その方が結構ですなハヽヽヽ」

嘉一郎（時計の針を氣にしながら）「時に、使者も氣がゝりですから、私がお伴をする事にしませう」

慶吉「然うですか？ぢやア御苦勞ですが、御同伴願ひませうか、自働車ですから御手間はかゝりません、ではこれから參りませう、……何うも失禮を」（會釋して立上る）

嘉一郎「では私も一寸と行つて來ますよ（お道は後から羽織を着せかける）……ア、その前に、新介に云渡す事がある」（慶吉を先に、店の方へ出て行く、母子は送つて出る）

（嘉一郎は、再び入る後から新介が蹤いて來る）

嘉一郎（正座まって）「先刻も云つて置いたが、今日、只今限り、暇をやるから此家を出て行つてくれ、……使ひ込んだ五百圓何がしの金は、汝が兎に角十五年勤めてくれたのに免じて、奇麗に棒を引いてやる、それでお互に何んにも云はぬ事にせう、……これで一切濟んだぞ、何も彼も奇麗に片附いたんだぞ、丸嘉も近い中に仕組を替へて、デパートメントにするから奉公人も入代なけりやアならない、殊に不都合を働いた者を店へ置いては信用にかゝる、只今限り暇をやるから直出て行つてくれ、善いか、分つたか、屹度、云渡したぞ」

新介（蒼青な顏で）「よろしうございます」

嘉一郎「善いか？分つたな」（云つて、出て行く、新介は默つて、腕組をしてゐる、自動車の笛、やがてお道と近子とは歸つて來る）

お道（柔かに）「新介何うもとんだ事になつたね、私は眞實に氣の毒に思つてゐるよ」

新介（血走った眼で見上げて、慄えた調子で）「難有うございます……この御恩は一生忘れません」

お道「エ……然う云はれると御挨拶に困つて了ふが、此家も昔の通り繁昌してるのなら軒簾を分ける位、何んでもない事だけれども、斯ういふ體裁だからまア察しておくれよ」

新介（自棄的な口調で）「イヤ、元はと云へば私が馬鹿正直だつたのです……旦那は明日支拂の約束手形の事ぢやア、血眼になつて御心配なすつてる樣だが、矢ッ張、紙に書いたものでなけりや口を利きませんからね、私なんかのやうな奉公人には「暇をやる」つて一口云はれたらそれ限何も彼も帳消になつて了ふんだから堪りません、何處へ泣附うにも、泣附く場處はありませんからね」

お道「それがね、今云ふ通り、して上げやうと思つても、出來ないんだから仕樣がないぢやアないかね、

聞けば汝の使ひ込んだ金を帳消しにしてやるつて事になつたんでせう、それで汝も我慢したら善いぢやアないか？表沙汰になつたら、汝は赤い衣物を着る處ですよ」

新介（嘲るやうな笑を浮べて）「ぢやアお庇で私も罪人になる處を助かつたやうなもんですね、それが御主人のお情ですか？アヽ奉公なんかするんぢやなかつた」

お道（不機嫌な顏色で）「汝は此頃人間が變つたやうですよ、今こそ、そんな口幅つたい事をお云ひだけれど、まア考へて見て御覽、汝が始めて店へ連れて來られた時は、白雲頭の、眼許光る鼻垂小僧だつたよ、居眠をすると云つちやア、よく大番頭に頭を張られて泣出したもんだが、田舍から出て來た者を可愛さうだと思つて、私はいろ〳〵氣を附けて庇つてやりました、何時か自働車から轢げ落ちて大負傷をした時なんか、私は寢ないで介抱してやつた事もありますよ、それを皆、忘れてお了ひぢやアなからうね？」

新介（眼を瞬いて）「そりやア奥さんには、いろ〳〵御信切にして戴きました、それを忘れはしませんが、私も御主人の家を自分の家のやうに思つて、奉公人といふ氣ではなかつたのです、傍に大きな店が出來て、新式で盛んに賣出した時も、この儘ぢやア今に此方が寂びれる一方だと、自分の事のやうに氣を揉んで、旦那に私の考を申上げた事も二度や三度ぢやアありません、現に奥さんのお耳にも入れました、けれども旦那は御不承知で、何アに、傍が皆デパートメント、ストアーになりや、此店丈が昔ながらの老舗で殘るから、却て繁昌するなんかと、頑固な事許り仰つてたんです、御自分で御氣の附いた時は、もう埒切れなくなつた時ぢやアありませんか……それでも此家には大した資本主が附いたさうですから、これから盛返されても行きませうが、唯私丈が、元の素裸で、街中へ追ッ放り出されるんぢやアあんまり情ないと思ひます」

お道「それは私も察してないぢやアないんだよ、神戸の息子が歸つて來て、彼の代になつたら屹度何うにか計らつて上げるからね、惡く思はないでゐておくれよ」

新介（冷笑）「奥さん、若旦那の代になるのを待つてたら私も腰が曲りませう、イヤ、もうそんな御戯談を聞いてられる場合ぢやアありません、期うしてもうお暇が出たんだから、私も今日から新規蒔直しをやらなけりやなりませんが、三十才にもなつて、地道から踏み出すんぢやもう追ッ附かない、これから一つ、相場師にでも化けて、運善く金蔓に取附きましたら、又改めて御挨拶にでも出ませうし、失敗つたらもう御目には蒐りますまひ」

お道「相場なんかへ手を出すより、何卒堅氣にやつておくれ、私は汝の事を忘れはしませんよ」

新介「堅氣になんかやるのは、馬鹿か、阿呆だしか思へませんね、現に赤菱商會なんかゞあんな大身代を拵へたのも、賄賂を使つたり、買收したりして、隨分不正な事をやつて來たお庇だと云ふぢやアありませんか、私もつく〳〵然う思ひます、何アに、長い者には皆が卷かれるんだから、少々位不正な事をやつても、後でその金を慈善事業か何かに寄附して、善い顔をしてりやア世間はそれで立派に濟んで行くんですよ、（近子の方を見て）お孃さんのお婿さんの家を惡口しては濟みませんが……」

近子（俯向いて考へ込んでたのが、顏を少し上げて）「お父さんからお暇が出たと云つても今日の今日出て行かなくても善いでせう」

新介「只今出て行けつて云ふ御命令が出ましたからね、私にしてもお暇の出た家へ一刻も尻を落付けちやアゐられません」

近子「私ね、せめてもの紀念に、汝に上げやうと思つて、麻の浴衣をこゝに縫ひかけてるのよ、今夜中に仕上げますから、それ丈は着て行つておくれよ」

お道「近子も汝の事を心にかけちやゐるんですよ、家が昔のやうだと評判の善くない處へ嫁になんかやるんぢやアな、私が屹度、何うにかして上げるんだが、これが浮世つて云ふんだらうね」

新介「折角の御信切は難有うございますが、もうお仕着を受ける爲めに一晩待つてる程の鼻垂小僧でもなくなつてゐます、それは折角お婿さんにお着せなすつた方が、お喜びなさるでせう」

近子「そんな忌味を云はれると口惜しいつたらありやアしない……あの堅氣だつた汝が店の金を使込むなんて、屹度何處かへ情婦でも拵へたんでせう、然うでせう、ね、お母さん、それに違ひないわ」

お道「唯、ムシャ、クシャ紛れに遊んだのでせう、ね、然うだらう？」

新介「ハ、、、始めはムシャ、クシャ紛れでしたが、これで今はもう、立派に一人前の情婦も出來てゐます……別に不思議もありません、商賣人が商賣氣離れて、かゝつて來ますと、生の素人なんかよりヅ、と情が濃くつて、便にもなりますよ、つまり虛榮や、外聞を氣にしないんですからね」

近子（勃として手近の浴衣地を拋り出して）「もう知らない、何うなと勝手にするが善い」

お道「新介もそんな面當を云つたりなんかするといふ法がありますか、假にも主人の娘ぢやアないか？」

新介「フン、主人の娘……まア然うでしたらうね」

お道（窘めるやうに）「私は何も彼も知つてゐますよ、それを大目に見てやつてたんです……馬鹿になつて知らん顔をしてたんです、その私の眼前で、娘を虐めて何うせうていふんだね？」

新介（顏色を動かし）「へエ……ぢやアスッカリ御存じでしたか？實はそれを種に、相場の資本を少しゆすりたいと思つてたんですが、駄目ですかなハ、、、」

お道「汝はそれ程、生根が腐つたのかえ？」

新介「貴方等が、御承知で、疵物の娘を賣物になさる

のも、あんまり立派なお心掛たァ見えませんね」

お道「その疵物には誰がしたんだ？」

（三人の視線が一つに閃き合ふ、奇怪な沈默が續く）

嘉一郎（汗を拭き〳〵入って來て）「新介はまだねるのか、出て行けつて云渡したぢやァないか？」

新介「荷物も整理ねばなりません、此から支度にかゝる處です」

嘉一郎（懷ろを押へて）「支度するなら早く彼方へ行つてサッサとしたら善いんだ、金庫のある室をウロ〳〵するなんて怪しからん、五百圓は帳消しにしてやつたが、後は鐚一文も汝に使はせる金なんかないんだぞ」

（新介は默つて、凄い眼光をして、店口へ出る）

嘉一郎「まァこれで安心したよ……近子は何うしたんだ？」

お道「イヤ、何うもしやしません、一寸と例の肝の蟲で」（羽織を取ってやる）

嘉一郎「然うか……コラ、二千圓現金で借りて來た、漸つと安心したよ、これでもう、いくら早く日が暮れやうが、夜が明けやうが、心配はしない、イヤ、先刻は、時計の針の進むのを見てると、一秒づゝ命が縮むやうな氣がしたよ」（金庫を開けて金を藏め）「ア、疲勞れた、氣づかれが出た」（と長く横臥する）

お道「それはまァ善ござんしたねえ……疲れてらつしやるなら、お湯へお入りなすつちやァ何うですか、もう沸いてゐませうよ、湯加減を見て來ませう」（起上る）

嘉一郎「ア、然うしてくれ、一風呂浴びて、ゆつくり一杯やらう、久しぶりに潤ろがう……近子、汝は何うしたんだい、欝ぎ込んでるぢやァないか？」

近子「別に何うもしませんけれども……、少し頭痛がしまして」

嘉一郎「嫁入前の大切な體だから用心おしよ、一つは陽氣の加減だろう、工合が惡ければ二階へ行つて、

休んだら何うだね？」

（お道の呼ぶ聲）「お湯が沸いてゐます、直ぐ入らつしやい」

嘉一郎「然うか……ヱ、とこの金庫の鍵は……近子、汝に預けて置かう……イヤ、私が自身に持つて居ろう、その方が間違ひ無しだ」（椽側傳ひに入る）

新介（店口の暖簾の間からぬっと現れる）「近子さん……先刻貴方が云つたのはありや本心からでせうか？あの浴衣を私に拵へてやるつていふのは、眞實ですか？」

近子（冷淡に）「もう知らない」

（傍へ膝行寄つて）「然う怒らなくても善いでせう、貴方はまだ私の事を忘れ切つちやゐないんですね？」

お道「もう、うるさいつてばね……汝は早くその情婦の處へ行つたら善いでせう、私なんか何うせ生の素人だからね」

新介「お母さんの前だからついあんな事を云つたんです」

近子「斯うなつちやもう今更何うにもなりやしないよ」

新介（哀願的に）「寧そ私と逃げて下さらんか？貴方と一緒なら何んなに落魄れても私はもう殘念だとは思ひません、長の御奉公の甲斐があつたと、それ丈でもう滿足します」

近子「逃げたら先は何うなるんだね（思案して）……まアも少し考へさせておくれよ」

新介（急に顏色を變へ）「フム、貴方は矢張、心の底は冷たい女だ、赤菱へ行つて贅澤な眞似がしたいんだろう、それならまア好きなやうになさるも善かろう……（發作的に）だが一寸とあの倉庫の中まで來て下さい、お別れに話したい事があるから」（白い手頸を握る）

近子（新介の顏をぢッと見て、身慄して振放し）「汝の顏は蒼青だよ恐くなつて了まふ、私は倉庫へなんかもう行かない……」

新介「何も恐い事はないから來て下さい」

近子　「私は先刻から頭痛がするから、少し休みますよ（起上つて）……明日の朝迄考へさせておくれ、兩親に此の上心配をかけても濟まないし、お互に一生の事だからね」（云捨てゝ、二階へ上つて行く）

新介（後姿を睨み上げて）「逃げ口を利くんか？……皆で人を蟲蚧のやうに思つてやがるんだな……待つてやがれ、よろしい、もう此家に未練は無くなつた」（急に四邊を見廻はし、懷から合鍵を出して手早く金庫の錠を捻ぢあけ、金包を盗んで、周章だしく椽先から逃げて行く）

お道（襷がけのまゝ駈け來つて）「アラ、近子はゐないのね、誰かこの坐敷から走つて出たやうだが……何うしたんだろう？」（室内を見廻はして）「オヤ、金庫の錠が開いてゐる……大變だ、大變だ……近子はゐないの、近子……貴方……貴方……大變ですよ、早く來て下さい、早く……」

嘉一郎（浴衣に着かへて）「何うしたんだ、大きな聲をして、騒々しいぢやアないか？」

お道（金庫を指ざし）「あれを……あれを御覽なさい……鍵は何うなすつたのです？」

嘉一郎「エ、金庫？……鍵はこゝに持つてゐる、開く筈がない（近寄つて見て）ヤ、しまつた、泥棒が合鍵を持つてたのか……しまつた、盗まれたんだ」

お道「何處から入つたんでせうね……近子は何處へ行つたんでせう、近子、近子……新介はゐないか？

善吉……善吉、皆何うしたんだ？」

嘉一郎（深い失望の色）「しまつた……とんでもない事になつた、新介の畜生に相違ない……文字鍵の符牒を知つてる者は彼奴より外にない早く電話をかけい、交番へ電話を……エ、周章てるな」（自分で電話室へ駈込む）

善吉（顔を出して）「何うしたんでございますか？エ、金庫の中から……」

お道「早く交番へ行つてをくれ……早くサ」（善吉は飛んで入る）

近子（囁囁を押へながら、階段を降りて來て）「お母さん何うしたんです？」

お道「何うも斯うもありやァしない、お金を……二千圓のお金を盗まれたんだよ」

近子「エ……まァ……」（釘付にされたやうに凝立する）

お道「汝が此處にゐると思つたから安心してたんだよ、賊は新介に違ひない、彼奴に……」

近子「お母さん、訴へるの丈は止して下さいよ……それは私が惡いのですから」

お道「何うして……汝、知つてたのかい？」

近子「それは新介が十五年の奉公の抵當に持つて行つたのです」

嘉一郎（電話室から出て來て、落膽し切つた顏色）「新介の野郎め、何處迄私に祟ろうとするんだ……殺してやつて腹が癒えぬ」

近子「私が二階へ上つたのが惡かつたのです、それで惡心を起したのでせう……それともァ、して私を嚇し付けて、後で盗む氣だつたか知ら……何れにしても私の考が足りなかつたわ、何卒内分にして濟まして下さい、お願ですから」

嘉一郎「踏んだ上を蹴られて堪るもんか、内分も何もありやァしない、もう交番へ訴へて出た、早く縛られてくれりや善いが……私もぢつとしちやゐられない私がも一度行つて來やう……」

近子（決意の色）「お父さん、まァ待つて下さい、斯うなりや私ももう腹ゞ定めましたから、お金の事なら自分で赤菱へ行つて、何度でも泣附いて見ます、新介の持つて行つた分は、あのまゝ奇麗にくれてやつた事になすつて下さい、表沙汰にすると、又何んな事を云出すかも知れませんわ、私は恐うございますから」

お道「然う、よく氣が附きましたよ、貴方何卒内分にしてやつて下さい、加之店から罪人を出すのは信用にもかゝりますから」（二人で抱留めるやうにする）

嘉一郎「お金つていふのは、汝等の考へてるやうな、そんな安つぽいもんぢやアないよ、今日お父さんが慶吉さんへ賴んだ時も、この額から、粘い、血のやうな汗がボタ〳〵垂るやうな氣持がしたんだ、女は涙さへ出して泣付いたら、幾何でも金が湧くやうに思つてゐる、だから男子の苦みが分らないつて云ふんだ、手を放せッ、愚圖々しちやアゐられない」（振放して行きかける）

善吉（顏を出して）「御安心なさいまし、盜人は捕まりました、新介さんが、角の交番の前の袋路次に追詰められて、縛られました、顏が血みどろになつてゐました……泥棒が新米だから逃げる方角が立たないんだつて、刑事が笑つてゐました、人がもう黑山のやうに群集つてゐます」

嘉一郎（躍り上つて）「然うか……ヤレ……ヤレ、助かつた、天罰だよ」

近子（蒼青な顏色で）「エ、血みどろに……可愛さうだわ

お金さへ返つたら願下にしてやつて下さいよ、ねえ、お父さん……お願しますわ」

嘉一郎「願下にしたら、今度は强盜になつて押込んで來るだろう、馬鹿な事を云ふもんぢやアない、あんな太い奴は、一度臭い飯を食つて見なけりや主人の恩が分らない、天罰敵面だ」

お道（諫めるやうに）「でも慶吉さんが然う云つてたぢやアありませんか？一度監獄に入つたら後が可哀さうですから……」

嘉一郎「赤菱のは出獄者保護事業に、三十萬圓の寄附したつていふんだ、彼奴なんかもその御厄介になりやア恰度善いんだ、汝等が何も心配する事は無い」

近子（胸苦しさうに）「私は心配ですわ……心配ですわ……ねお母さん、新介が皆云つて了つたら、何うしませう……何しませう、」（蹌踉するのを母が抱いてやる）

お道「コレ……氣を落着けるんですよ」（憐むやうに、見て、太息を吐く）

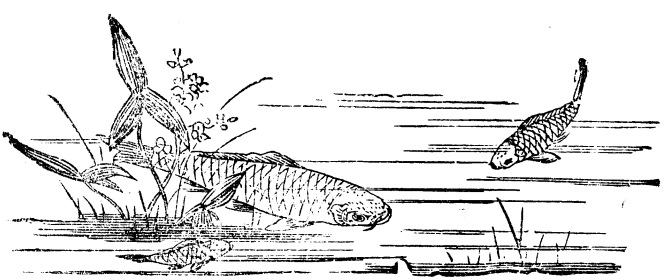
（夕陽がパッと赤く倉庫の白壁にかしかゝる）

近子（ヒステリカルに）「ア、お母さん、御覽なさい倉庫が眞赤になつたぢやアないの……眞赤に……血みどろに……新介が惡いんぢやアないわ……惡いんぢやアないわ……（身悶えして泣叫ぶ）

お道「夕照がしたのよ……もう何も心配する事はない、氣を落着けるんですつてばねえ」（抱擁めてゐる）

嘉一郎「眞實にもう氣を落着るが善い……金は大丈夫返つて來る、ア、、私はこれで漸つと安心した、明日から、丸嘉の運も向つて來るんだよハ、、、、」

（金庫の前に座つて快心の笑）

（赤く燃えた倉庫の壁の、夕陽の反映が見る〳〵黃黑く不安に暮れて行く）

（カーテン）